

今は昔、（くわんせうじゆうりきうのこゝろ）遍照寺僧正寛朝といふ人、仁和寺をもしりければ、仁和寺のやぶれたるところ修理せさすとして、番匠（ばんしやう）（大工）どもあまたつどひて作りけり。日暮れて、番匠ども、おのおの出でてのちに、けふの造作はいかほどしたるぞと思ひて、僧正、（ねんじゆう）中結（なかつむす）ひうちして、たかあしだはきて、たゞひとり歩みきて、あかる杭ども結ひたるもとにたちまはりて、なま夕暮にみられける程に、くろき装束したる男の、烏帽子引きたれて、顔たしかにも見えずして、僧正の前に出で来て、ついゐて、刀をさかさまにぬきて、ひき隠したるやうにもてなして居たりければ、僧正「（おまえ）かれは何者ぞ」と問ひけり。男、かた膝をつきて、「わび人に侍り。寒さのたへがたく侍るに、そのたてまつりたる御衣、一二、おろし申さんと思給ふるなり」といふまゝに、飛びかゝらんと思ひたるけしきなりければ、「（おまえ）ことにもあらぬことにこそあんなれ。かくおそろしげにおどさずとも、たゞ乞はで、けしからぬぬしの心ぎはかな」といふまゝに、ちうと立ちめぐりて、尻をふたと蹴たりければ、蹴らるるまゝに、男かきけちて見えずなりにければ、やはら歩み帰りて、坊のもと近く行きて、「人やある」と、たかやかによびければ、坊より、小法師走り來にけり。僧正「行きて火ともして來（来）よ。こゝに我衣はがんとしつる男の、（にわか）俄に失せぬるがあやしければ、見んと思ふぞ。法師ばら、よび具して來」と、のたまひければ、小法師、走りかへりて、「御坊ひはぎにあはせ給ひたり。御房たち、参り給へ」と、よぼゝりければ、坊々にありとある僧ども、火ともし、太刀さげて、七八人、十人と出できにけり。

「いづくにぬす人はさぶらふぞ」と問ひければ、「ここにゐたりつる盗人の、我衣をはがむとしつれば、はがれては寒かりぬべくおぼえて、しりをほうと蹴たれば、うせぬるなり。火を高くともして、かくれ居るかと思よ」とのたまひければ、法師ばら「をかしくも仰せらるゝかな」とて、火をうちふりつゝ、かみざまを見るほどに、あかる杭の中におちつまりて、えはたらかぬ男あり。「かここにこそ人は見え侍りけれ。番匠にやあらんと思へども、くろき装束したり」といひて、のぼりて見れば、あかるくいの中におちはさまりて、みじろぐべきやうもなくて、うんじ顔つくりてあり。さかてにぬきたりける刀は、いまだ持ちたり。それを見つけて、法師ばらよりて、刀も、もとどりも、かいなどを、とりてひきあげて、おろして率て参りたり。具して坊に帰りて、「今より後、老法師とて、なあなづりそ。いとびんなきことなり」といひて、着たりける衣の中に、綿あつかりけるをぬぎて、とらせて、追ひいだしてやりてけり。